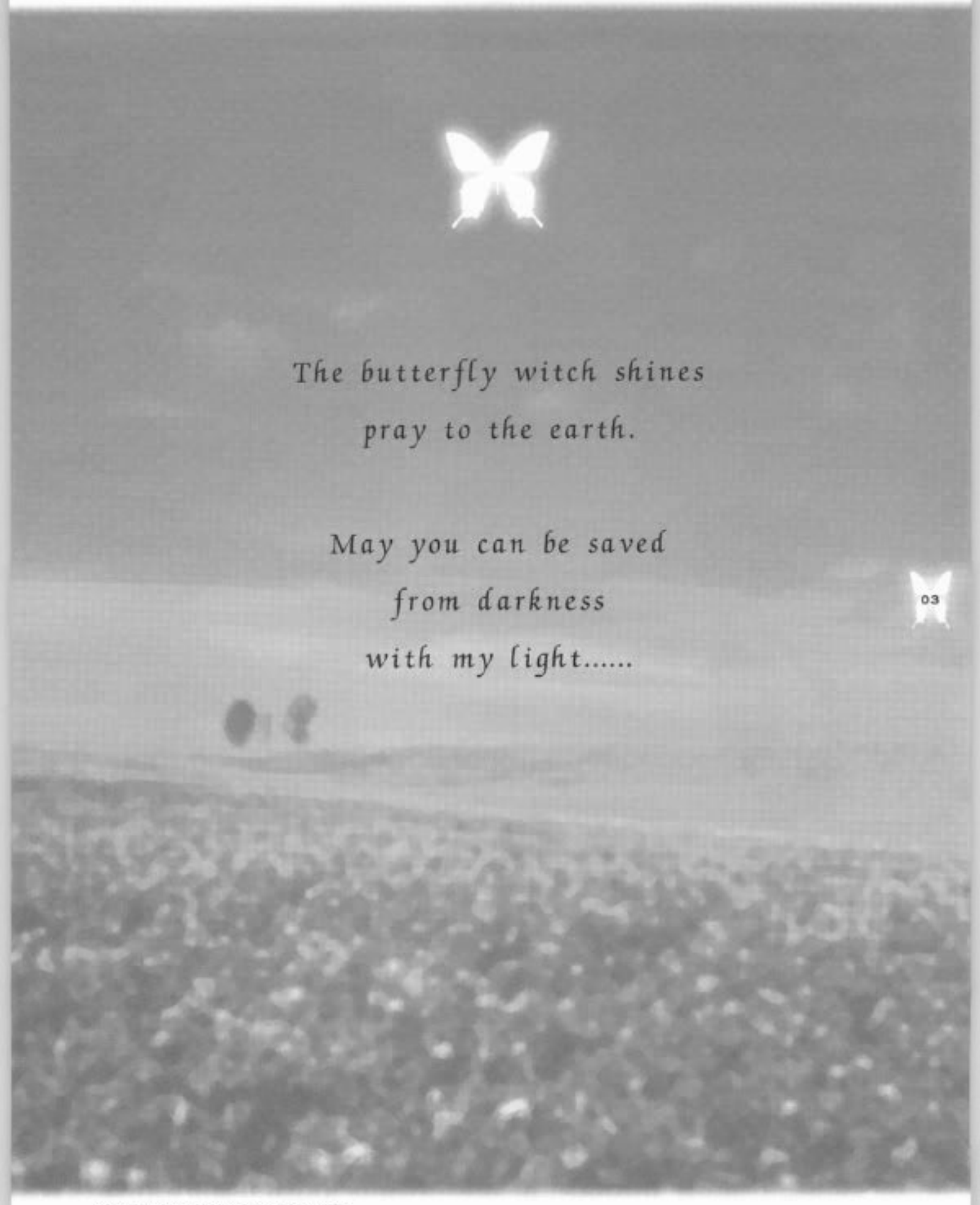
輝く世界が地に祈る
SHIGUNYAN
http://prinprin.
cool.ne.jp
For Adults


The butterfly witch shines
pray to the earth.
May you can be saved
from darkness
with my light.....
03

◆CONTENTS◆

==05～20==
しぐにゃん

==21～26==
文：メイソン
絵：しぐにゃん

表紙：しぐにゃん

■皆様今日は！しぐにゃんです。
今までお世話になっていたメイソンさんとの
合同サークル『PRINCESS』レーベルで
ナコルル合同誌を発行ですヨーホホー！

■今回のナコはロリで良いという事で
サクサクと描き進めていると
とんでもなくロリィになってしまいました。
たまには、そんなナコを愛でてやって下さい。

ではではささっと本文へどうぞー。

ナコルル
ふぁんぶっく
なんばぁ四
輝く蝶が地に祈る
05

キィーン
ガシャッ
……
ウソだろぉ……
じ～～～ん
さぁっ
お父様の事！教えて頂きます！

ほ～
お父上を探してね～

そ～いや
3日程前に
よく似た奴を見たなぁ…

まぁ
俺に勝ったら
教えてやるよ

う…

と言って
しまった

まずい…

からかったりして
悪かったな

詫びとしては何だが
一ついい事を
教えてやろう

…何です？

『色事』だ

俺はその道の
熟練者だからな

いろごと…？

これで何とか
ケムに巻ければ
良いんだが…

生きてゆく上で必要不可欠な仕技だ知らないと後々苦労するぜ

さぁ目を閉じてくれ

知らない方の前で目を閉じる事など出来ません！

いや　俺は別にどっちでもいいんだが

!!?

ビクンッ

ん…

ビクッ

ビクッ

ん…

ぴちゃっ

くちゅっ

んんッ

ふ…

ん…
とろお…
接吻一つで
膝が抜けるなんて
剣の道では一流でも
色の道では未経験の
ド素人の洗濯板の
部外者だな
……
例えの中に
おかしなものが
入ってませんか？
気のせいさ
!?
ひあっ
ぺろっ
ビクッ
や…っ
な…何を…ッ
放して
下さ…
ふるるっ
あ…
んっ

はぁ
ふるるっ
ぷるっ
ん…っ
胸も尻も
膨らみかけ
……か
むにっ
あっ
んふ…
ぷちゅ
その割にえらく
感度がいいな
あ…んっ
はぁ
はぁ
ぴくっ
ぴくっ
こっちの道も
才能あるぜ
きっと
ぷっ
ちゅぷっ
ちゅぷっ

ぴくっ
ひくひくっ
濡れて光ってるぞ
ふるふるっ
や…
ダ…メです
遊女の蜜壺よりやらしいぜ
そんな所汚いです…っ
はぁ
あッ
くぶ…んっ
どうだ？この辺か？
ビクンッ
あっ
ビクッ
あ…ふぅ
すご…いれ…すッ
ビクッ
はぁ
そうそう素直に声出してイイ感じだな
ぐちゅ
ぐちゅぷっ
ぐちゅぷっ
ぐちゅぷっ
ぐちゅぷっ
ぐちゅぷっ

吸い付いて来る締め具合…かなり狭そうだな
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ
あっ
はぁ
んっ
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ
ん！
も…ダメ…れす！
ダメ…
はぁ
ふるるっ
あふぅ！
はぁ
ガクガクッ
や…めて下さ…ッ
頭が…おかしくなっちゃ…いそ…れすっ!!
ビクッ
ダメ！らめぇッ!!
ぷちゅっ

ふるるっ
あ…
はぁ
はぁ
は…んっ
ひくひくんっ
ひくっ
あふぅ…
ひくんっ
ぴくっ
はぁ
はぁ
この位で
疲れてるようでは
色事は修得できんぞ
今のはまだ
前技だ
これからが
最も大切な
本番なんだから
はぁ
まだ…
これ…からが
本技です…か？
ふるるっ
はぁ
私…もう
身体が…
持ちま…せん
そう…
コレを使ってな
たらり…

キャアァァァ！
こ…
これが殿方の…ッ!?
どん
ビクッ
わ…私…
こんなの無理
です…っ
ちゅ
大丈夫
はぁ
はぁ
んっ
あ…
はぁ
はぁ
ビクッ
ゆっくり
やさしく教えて
やるから
ちゅぷっ

ちゅく…
力を抜いて
ちゅぷっ
んんっ！
はぁ
はぁ
ん…
ぴくっ
ぴらっ
はぁ
はぁ
ズプ…プ…
あ…ッ！
ぐぷっ
にゅるんっ
あ！…
やっぱ狭くて入り辛いな
はぁ
ぶるるっ
ビクンッ
入ってきます…ッ!!
ビクンッ

ぢゅぷぷぷっ
あっ
ビクッ
はぁ
どうだ？
酷く痛むか？
あふッ
入っちゃう
入っちゃい
ま…すぅ！
いえ…ッ
痛みは…
大丈夫れ…す
はぁ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
そうか…
では動くぞ！
ぐちゅぢゅぷ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
はぁ
ひッ！
あ…ッ
はぁ
くりゅ
ん！
ぐちゅ
ぐちゅ
はぁ
だ…め…
そんなに
…してはっ！
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
あっ
ああっ

ビクッ
ぐいッ
…ッ!?
慣れてきたようだな じゃあ次の型だ
片足を上げて… これでもっと奥まで深く挿入できる
あくぅッ!
あンっ
んんっ!
くぅふぅっ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
凄…ッ 深い…です!
型が少し変わっただけで感じ方もこんなに変わるなんてエ!
色の道の凄さが分かったか?
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
んッ
あっ♥

次は後ろ向になって…
こうすると男が動き易くて激しく突ける
ぐちゅ
ずちゅ
あぁーーッ
あっ
くぅッ
ぐちゅ
ずちゅ
ぐちゅぐちゅ
あ…ダメれすそんな…ッ激し…っ！
ぐちゅ
ずちゅ
あっ
あン♥
ビクッ
恥ずかしいのに突かれる度に声が出ちゃいますッ！
も…身体が持ちま…せん！
ぐちゅ
ぐちゅ
ずちゅ
や…
ダメ…
感じ過ぎて頭が…
真っ白になり…そ…ッ
ずちゅ
ぐちゅ
ずちゅ
あっ♥
ダメ！
や…あ！
ビクッ

ああぁぁーーーッ!!
どくっ
どくん
ドクッ
はぁ
はぁ
はぁ

どうだ？
お前さんの知らない事ばっかりだったろ？
色事には他に四十以上の型があって覚えるのは一苦労だがその気があるのなら いつでも教えてやるぞ
あの…
それより お父様の事をご存知だったのでは…？
や…だから あれは… その…
そう！人違いだったんだ！
…ウソをおつきになったんですね？
ギャーッ
終

輝く蝶が地に祈る

文　メイソン
絵　しぐにゃん

「キャアアア！」

少女の悲痛な叫び声と共に短刀が宙に舞った。少女が大切にしているチチウシと呼ばれる小型の剣だ。愛刀が自分の手から離れた瞬間、少女は深い不安に襲われた。

いつもチチウシがあった。いつも少女は自分の身をこれで守ってこれた。なのに、今少女の手には何も無い。あるのは恐怖だけ。

少女は激痛を堪えるように地面にうずくまっていた。かろうじて指が動かせる程度で、もはや体の自由は奪われていた。目に見える傷は殆ど無いが長時間の戦闘により体力が奪われたせいだ。

ここは人里離れた深い森の中。まだ人の手が加えられていない為か、少女が大切に守ってきた為が、美しい水を湛えた湖が点在する清き場所のはずだった。この男が来るまでは。

「我から逃げられると思うな。愚民よ。」

男は冷酷な眼差しに残酷な笑みをこぼして少女を見下ろした。

「殺される恐怖に震える瞳は快感だが、即座に殺してしまっては勿体無いだろう？その瞳をさらなる快感へ誘う良い方法を我は知っている。」

男の大きな掌が、少女の頭を掴んだ。男の顔が、息がかかるほど近くに寄ってくる。少女が驚きと怒りに目を見開いた瞬間、男の魔手が少女の肢体に伸び、少女が身を引く瞬間、身に纏っていた帯を荒々しく剥ぎ取り、素早く少女の腕を後ろ手に縛り上げた。動きを封じられた少女の衣服を、男は容赦なく切り裂いてゆく。曝け出された少女の乳房はまだ熟しておらず、その頂点はピンクの乳首で彩られており、まだ除毛の生える気配すら無い秘裂は充血しヒクヒクと淫猥な動きを見せた。

穢されて殺されるくらいならば自害して……そう少女が考えた瞬間、男は小さな乳首を口に含み吸い立てた。少女は恐怖と未知の快感に身をよじる。男は舐め上げながら嘲笑うかのような声で少女の耳に甘い吐息と共に囁いた。

「愚かなヒトという生物は、自ら死のうとするというが、まったくもって傲慢な愚物だな。お前もその仲間か？お前には生きて成さねばならぬ事があるのだろう？そう…父と呼ぶ者を探しださねばならぬと言っていた。それを果たさず自分の事だけを考えて死ぬ事が、どれほど愚劣な行為か考えてみるが良い。」

その言葉が男の策略だという事は少女にも分かっていた。だが、この男に弄ばれ穢されたとしても父を探しださねばならないのは確かである。殺されるかもしれない。だが殺されないかもしれない。答えは分からないが自ら死を選ぶ事は出来ないと決意した。それなら生きる可能性を見出せるまで耐えさせてと地に祈り、少女は心までは穢されまいときつく目と閉じ唇を噛み締めた。

「何をしている。ほら、愚民には勿体無い代物だ。」

その言葉に少女が目を開けると、男の股間にひくつく陰茎がそそり立っていた。それは血管が浮き出るほど猛り立ち、逞しく天を衝いている。

「舐めさせてやる。早くしろ。」

少女は戸惑いながらも覚悟を決めた。私は生きなければならない……。

身を起こし、愛らしい唇を陰茎に添わせた。表情を伺いながら、おずおずと舌を這わせる。傍目から見ても拙い愛撫だが、潤んだ瞳や唾液で濡れ光る唇がゾクっとくるほど悩ましい。少女は教えられる通り、括れに舌を這わせ、激しく擦り上げた。懸命に口腔の中の肉棒を舐め回し、吸い上げている。

「そんなもので我が満足できると思うのか？」

男は少女の頭を掴むと強引に固く尖った陰茎を少女の口に根元まで押し込んだ。強引なピストンに少女は顔を歪める。陰茎が少女の唇で擦られる度に唾液が飛び散り、ぐちゅぐちゅと淫猥な音が広がる。

「んんっんっぐっ……」

少女は口を塞がれる息苦しさに悲鳴を上げながら堪えたが男は少女の口を犯し続けた。半裸の少女が四つん這いで、口に男根をねじ込まれ、苦しげに呻く姿態から立ち昇る淫香は男を高みへと誘っていった。

男は突然少女の頭を押さえ込んだ。その瞬間、口腔を犯す男の陰茎がビクンビクンと痙攣し大量の精が飛び散った。

「う……ッぐ……ッ」

溢れた白濁液が可憐な唇からだらしなく溢れ流れ、受けきれなかった精液が顎を伝って、滑らかな乳房にボタボタと滴う。少女は顔中に広がる噎せ返るような男の臭いに顔を顰めた。まだあどけなさの残る愛らしい少女の顔に己の白濁した液体がまみれている。その淫猥な姿は男の快感をさらに昂らせた。

男はきめの細かい滑らかな肌を撫でながら下腹部へと指を近付いていく。触れられた部分からはゾクリとする甘美な疼きが沸き上がり、少女はそのおぞましい愉悦に恐怖した。

「ん…くッ…はぁっ……」

少女は耐えきれず、甘い吐息と淫美な声が吐き出される。男があどけない秘裂へ指を挿し込むと、指先がとろりと温かいぬめりに呑み込まれる。少女は眉をきゅっと絞り、長い睫毛を震わせ、諦めと哀切の表情で懸命に耐えた。

すると男は小さく尖った花芯を指でこね回し、ひくひくと押し返す可憐な痙攣を楽しんだ。

「ひあッ！ダメ…ッそれ…あッ」

唐突に恐ろしいほどの快美感が躯の中心を貫き、淫らな喘ぎ声が吹き零れた。溢れ出る大量の愛液が敏感な下腹部を撫でる指を濡らしていく。

男は止めど無くぬめる花芯を擦りあげ、刺激を繰り返す。充血し、突出した花芯を執拗に擦り上げられて、少女は小刻みに声を漏らし、ときおりビクンと抗えない快感に躯を震わせながら高みへと誘われていった。艶かしく上気した滑らかな肌には、美しい珠の汗が浮き出ていた。腰はがくがくと踊り、自分では理性に耐えているつもりだったが、我知らず愛撫をせがんで男へと腰を突き出していた。張り詰めていた理性が押し寄せる官能の波に飲み込まれていく。

「欲望によがり狂う姿こそ愚民に相応しい本当の姿だ。ククク…いいぞ。我にその身を捧げるが良い。」

男に指で弄ぼれていた感覚が途切れた瞬間、呼吸を整える間も無く、熱い塊が柔肉を押し開いて少女の中に進入をはじめていた。

「や…あッやめ…ッッあぁっ」

あどけないスリットを指で割り広げ、じりじりと狭い入口を押し開いていく。あれ程の愛液を垂らしていたのに、弾力のある肉壁は男の陰茎の進入を拒んだ。なかなか挿入できない事に苛ついた男は切っ先が半分ほど埋まったところで、強引にペニスを肉壁の奥へと一気にねじ込んだ。

「ひッあぁぁ――ッッ」

少女の全身を新たな悦びが駆け巡り、我を忘れて淫猥な叫び声を上げた。

十分にぬめっているはずの肉路の強烈な締め付けに男も一瞬我を忘れかけた。肉孔は限界まで張り詰めて男の陰茎を包み込んでいる。幾重もの粘膜がペニスに絡みつき、みっちりと肉柱を食い締める。まるで膣奥へと誘うかのように切なくきゅんきゅんと波打ちながら。

「すばらしい。我にこれほどの悦楽感を与えるとは…。」

男は肉壁の収縮を楽しむようにゆっくりと抜き差しを繰り返し、少女は男根の動きに合わせるかのように背中を仰け反らせた。子宮口に当たるほど奥までペニスを挿し込みこねくるように動かすと、根元まで飲み込んだ陰唇の隙間から、少女の愛液と男の精液が混ざりあった白く泡立った液体が吹出された。

少女の身体には陰茎で貫かれた部分を中心に、まるで痺れるかのような凄まじい快感が全身に駆け巡った。小さな身体に収まりきらないほどの荒れ狂う情動は、無理矢理犯されているという状況さえ忘れさせていた。

男は締め付ける肉壁を味わうように激しく腰を振る。未熟な膣をえぐられながら、少女の中に快楽が込み上げる。それを堪えようとする程に、幼い身体を遠慮無しに食られる歓喜が理性を痺れさせる。

「ん…あッ…はぁ……」

堕ちてはダメだという声が遠くなってゆく。

甘い吐息と荒い息遣いの少女に、もはや時間の感覚は残っていなかった。男に幾度も内壁を貫かれる度、喉の奥から自然に喘ぎ声が洩れた。しっかりと尻を掴んで激しく膣奥を突き上げ、最深部までを容赦無く貫くピストンに、頭の中は真っ白になった。

「きゃふ…ッあ……ッ」

快楽と理性の狭間で葛藤する少女は、不意の刺激に艶やかな声を漏らした。男が少女の首筋を舐めあげたのだ。

すると少女の身体が一瞬悩ましくのけぞり、膣口が驚く程きつくペニスを締め上げた。ペニスを絡めとるような淫らな粘膜の動きに、男は夢中で奥まで突き立てる。うわ言のような喘ぎ声が絶え間なく噴きこぼれ、だらしなく開いた唇からトロリと唾液が伝う。必死で快楽に飲み込まる事を拒みながら。

少女の苦しむ姿に男は昂り、貫き上げるピートが段々と早まった。それが最高に達し、少女が壊れるかと思われた時、男は思うさま精液を肉壁の奥へと吐き出した。陰唇からは精液が溢れ出て、地面へと飛び散った。少女はビクンビクンと脈打つ陰茎の動きを膣内で感じながら、解放される嬉しさと、もっと快感が欲しいと身体が欲しているのを感じた。

精液を肉壁に擦り付け、溢れ出るのを押し込むかのように陰茎を何度か突き上げると、男は陰茎を秘裂から抜き出した。陰唇からはゴプっと白濁した液体が滴り出て地面を彩る。

肩で息をしながら、苦しそうに涙をこぼしている少女とは対照的に、男は出会った時と変わらぬ表情で言い放った。

「これで終わりなどということは、もちろんあり得ないぞ。安心するがいい。お前自らが我を崇め、欲するまでこの宴は続く。」

男はそう言うと、勃起したままの太竿を再び粘膜に突き立てた。

＝＝終＝＝

NAKORURU FAN BOOK No.04
SHIGUNYAN
presents